

## 未来を表す現在時制と will

時崎 久夫

### 0. はじめに

英語では、未来に起こる事柄を表わす方法の 1 つとして現在時制を用いる場合がある。(1a)がその 1 例であるが、(1b)のように同じ leave という動詞でも、will を用いる実例もある。

- (1) a. My train leaves Euston at 11:30.  
b. Mrs. McIntosh Buell will leave Sunday to return to her home in Santa Barbara, Calif., after spending a week in her Polo Grounds home. (Brown Corpus)

これに対し、(2)の従属節では、(2b)のように will を用いることはできず、(2a)のように、動詞の現在形を用いなければならない。

- (2) a. When he arrives, the band will play the National Anthem.  
b. \* When he will arrive, the band will play the National Anthem.  
(Quirk et al. 1972: 780)

また次の例では現在時制と will の両方が可能である。

- (3) a. I hope that the parcel comes in time.  
b. I hope that the parcel will come in time. (Quirk et al. 1985: 1008)

なぜこのような場合に未来の事柄を表すのに現在時制が用いられるのであろうか。またなぜ(2b)は非文法的なのであろうか。伝統文法や学校文法では、(1a)は確定的な未来、(2a)は時と条件の副詞節中ということで、現在時制の一用法と単に述べられることが多い。しかしこれは分類・記述であって、納得のいく説明ではない。小論はこの点を深いところから説明しようとするものである。以下第 1 節では現在時制は無標(unmarked)の時制であることを論じ、第 2 節で

は will は推測の助動詞であることを述べる。結論として、この考え方により、未来を表す現在時制と will の用法に一貫した説明を与えることができることを述べる。\*

## 1. 無標の時制としての現在形

### 1.1 現在時制を示す標識は存在しない

未来を表す現在時制を考える前に、まず現在時制とは何かを考えてみる。英語の場合、動詞の現在形は、主語が 3 人称単数の場合を除き、動詞の原形と同形である。また主語が 3 人称単数の場合の-(e)s も、現在時制を示す標識ではなく、主語との人称と数の一致(agreement)を示す要素である。このことは動詞の過去形と比べて見ればわかりやすい。過去形は主語の人称・数に関係なく-(e)d を持つので、この語尾は過去を示す標識である。

(4) a. She play-s tennis.

-3sg

b. We play -ed tennis.

-past

すると英語は、過去時制を-(e)d という標識で表すが、過去でない時制には標識を用いず、無標(unmarked)のままにしておくと言える。一般に現在時制、現在形と呼ばれているものは、「過去であると示されていないもの」と考えるべきであろう。

現在時制が無標であり、過去時制が有標(marked)である言語は、他にも広く見られる。例として(5)のドイツ語、(6)のロシア語を見てみよう。どちらも主語との一致要素に加え、過去時制の標識を持つ(-t と-l)が、現在時制の標識は持たない。

(5) a. ich kauf-e

I buy-1sg

b. ich kauf-t-e

I buy-past-1sg

(6) a. Q /it '

- I read-1sg
- b. Q /it la
- I read-past-Fsg

こうしてみると現在時制が無標であることはある程度の普遍性を持つものと考えられるのではないだろうか<sup>1</sup>。過去の事柄を「過去である」と標識で示す過去時制とは異なり、いわゆる現在時制は過去時制標識がないことから「過去ではない」ことが推察されるにすぎない。すると現在時制が現在だけでなく未来の事柄も表すことができるのも不思議ではないと言える。次のセクションではこの点を詳しく見てみることにする。

## 1.2 自由な時の指示

無標の時制としての現在は、有標である過去時制に比べ、時の指示が自由であると思われる。ここでは Quirk et al. (1985)の分類と例を見ていくことにしよう。まず単純現在時制の意味として、状态的現在、習慣的現在、瞬間的現在の3つをあげている。

- (7) a. Everyone likes Maurice. [state present]
- b. We go to Brussels every year. [habitual present]
- c. Here comes the winner! [instantaneous present]

これらは現在の事柄を表す用法といえるが、単純現在は過去の事柄を表すこともできる。

- (8) a. I couldn't believe it! Just as we arrived, up comes Ben and slaps me on the back as if we're life-long friends. [historic present]
- b. I hear that poor Mr Simpson has gone into hospital. [verbs of communication]

(8a)は歴史的現在といわれる用法で、(8b)は伝達動詞の場合である。そして次が未来に言及する用法で、Quirk et al. (1985)は主節、条件節、時の節という分け方を行っている。

- (9) a. The plane leaves for Ankara at eight o'clock tonight. [main clause]

- b. He'll do it if you pay him. [conditional clause]
- c. I'll let you know as soon as I hear from her. [temporal clause]

最後に小説的な話法や演劇のト書きをあげている。

- (10) a. The crowd swarms around the gateway, and seethes with delighted anticipation; excitement grows, as suddenly their hero makes his entrance...  
[fictional narratives]
- b. Mallinson enters. The girls immediately pretend to be working hard.  
[stage directions] (Quirk et al. 1985: 179f.)

これらの用法を見てくると、単純現在といわれるものが、かなり自由な時の指示を持っていることがわかる。

### 1.3 時間指示の決定

現在形が自由な時間指示を持っているとすれば、逆にどのように時の指示は個々の場合に決定されるのであろうか。まず次の例を考えてみよう。

- (11) a. The Minister is to meet union officials (tomorrow).
- b. The Minister is meeting union officials #(tomorrow).
- c. The Minister meets union officials #(tomorrow). (Leech 1987: 103)

(11a)では tomorrow はあってもなくてもよいが、(11b)と(11c)では必要である。be to の場合、「会うことになっている」という現在の状態を示すが、現在進行形と単純現在の場合は動作であり、その時を決定する語句が必要となるからであろう。be to で時を表す語句がない例は他にも見られる。

- (12) a. The Queen is to visit Sri Lanka. (Leech 1987: 103)
- b. There's to be an official inquiry. (Quirk et al. 1985: 217)

以上この 1 節ではいわゆる現在形が無標の時制であることを述べた。現在時制を表す標識が存在しないこと、自由な時の指示を持てること、他の語句によ

って指示する時が決定されることを指摘した。

## 2. 推測の法助動詞としての will

### 2.1 未来時を表す方法

この節では、未来時を表すのに単純現在を使う場合と will を使う場合について検討する。まずはじめに英語で未来時を表すのにどんな方法があるのかを Quirk et al. (1985)に従って見ておこう。

- (13) a. He will be here in half an hour. [will/shall + infinitive]  
b. When are you going to get married. [be going to + infinitive]  
c. The orchestra is playing a Mozart symphony after this. [present progressive]  
d. What will you say if I marry the boss? [simple present in a conditional clause]  
e. School finishes on 21st March. [simple present in a main clause]  
f. We'll be flying at 30 000 feet. [will/shall + progressive infinitive]  
g. There's to be an official inquiry. [be to + infinitive]  
h. The train is about to leave. [be about to + infinitive]  
i. Tomorrow is going to be another cold day.  
j. I'm just going to read your essay.  
k. be on the point of + v-ing  
l. may/must  
m. be sure to/be bound to  
n. hope/intend  
o. be due to
- (Quirk et al. 1985: 213-218)

以上のように、英語で未来時を表すには多様な表現があり、何も will に限ったものではないことがわかる<sup>2</sup>。それぞれの表現がその意味によって未来の事柄を表しているのである。

### 2.2 will の意味

では現在形の意味、will の意味とは何だろうか。どういう場合にそれらが未来の事柄を表すのだろうか。次の対比を見よう。

- (14) a. The Yankees play the Red Sox tomorrow.  
 b. The Yankees will play the Red Sox tomorrow.
- (15) a. \* The Yankees play well tomorrow.  
 b. The Yankees will play well tomorrow. (Lakoff 1971:339, Goodman 1973:76)

学校文法で言われるように、(14a)のような確定的な未来の事柄では現在形を用いることができる。ヤンキースがレッドソックスと対戦するのは決定されている。これに対してヤンキースが良い試合をするかどうかは今わからない。よって(15a)の現在形は容認されない。

しかしこの説明はもう一步掘り下げる必要がある。同じ未来でも、なぜ確定的な事柄は現在形でよいのか、なぜ確定的でない事柄には will が必要なのか。前節では現在形が自由な時を指示できることを述べた。しかしこれには制限があるということである。時制のある形を使った場合は、その事柄を事実として述べていることになるため、確実に事実になることしか現在時制では表せない。確実に事実になると言えない未来の事柄は、推測で述べるしかない。will は話者の推測を表す法助動詞であり、これを使うことによって初めて話者は未来の確定的でない事柄を述べるのであり、これを使うことによって初めて話者は未来の確定的でない事柄を述べるのであり、これを使うことによって初めて話者は未来の

このことを次の例でもう少し考えてみよう。

- (16) a. \* It rains tomorrow.  
 b. It will rain tomorrow. (Comrie 1985: 47f.)

明日雨が降るかどうかは確実には分からないので、will を使って推測するしかない。しかし Comrie (1985: 47f.)は、もし神様が言うのであれば、(16a)は容認されると述べている。これは神様にとっては天気は完全に予測可能で、推測は不要であるために will も不要であると説明できる。

### 2.3 現在の状態の推測

will が話者の推測を示すことは、次のような例からもわかる。

- (17) a. He will be in Paris at the moment.  
 b. Will George be at home now? (中右 1994: 247)

at the moment や now という語句から分かるように、この will は未来を示しているのではない。現在の状態であっても、話者は自分の知りえない事柄は、推測するしかない。彼がパリにいるかどうか、ジョージが家にいるかどうかを知らないので will を用いて現在の状態を推測しているのである。次の例も will を推測の助動詞と考えることによって説明できるだろう。

(18) a. \* I have to go home next month because my sister will get married.

b. I have to go home next month because my sister is going to get married.

(Hall and Hall 1970: 138)

(18b)は結婚が予定されているので帰るということで問題ない。しかし(18a)のように will を使ってしまうと「結婚するだろうから帰る」ということになり、不自然である。結婚を推測したために帰るということは常識的にはありえないからである。もし will を未来を示す助動詞と考えるのであれば(18a)は容認可能になるはずである。(18a)の従属節は学校文法でいう時と条件の副詞節ではないので will が必要と予測してしまう<sup>3</sup>。しかしこれは事実には合わないので、やはり will を話者の推測を表す法助動詞と考えるべきである。

### 3. 未来の状態

#### 3.1 動作動詞への再解釈

さて次に状態動詞の場合を考えてみよう。

(19) a. \* I know French next week. [stative]

b. I know the answer tomorrow. [inchoative]

(20) a. \* Next month John likes Mary. [stative]

b. Next week we own the house. [inchoative]

(19a)、(20a)を見ると、状態動詞は基本的には未来の事実を表せないように見える。しかし Prince (1982)が述べているように、(19b)、(20b)のように、動詞が動作の開始を示す起動動詞(inchoative)と再解釈されれば容認可能となる。わかりやすく言えば、状態動詞が動作動詞と解釈される場合である。Prince (1982)は

さらに動作動詞であっても、activity の意味では現在時制は不可であり、event, achievement, accomplishment の意味では現在時制が可能であることを指摘している<sup>4</sup>。

- (21) a. \* Tomorrow I run for mayor. [activity]  
b. Next year I run for mayor. [event]
- (22) a. Tomorrow we reach the top. [achievement]  
b. Tomorrow I draw a circle. [accomplishment] (Prince 1982: 456)

### 3.2 時の上限

また Goodman(1973)があげている例も興味深い。

- (23) a. I am busy tomorrow.  
b. I can't see you tomorrow.  
c. The computer is down tomorrow. (Goodman 1973: 82)

(23a)、(23c)が容認可能なのは、確定した未来の事柄のため、推測が不要であるからだろう。明日 10 時までという副詞句がついた場合も容認可能である。

- (24) a. The computer will be down until 10:00 tomorrow.  
b. The computer is down until 10:00 tomorrow.

しかし 10 時までにという副詞句は現在時制と共起できない。

- (25) a. The computer will be down by 10:00 tomorrow.  
b. \* The computer is down by 10:00 tomorrow.

これは、by 10:00 がつくと動作の読みが必要となるが、be down はあくまで状態述語なので矛盾するためであろう。

では述語が未来の状態を示す場合に will が必要となるのはどういう時だろうか。

- (26) a. John will know the answer tomorrow.



b. \* John knows the answer tomorrow.

(27) a. John will be dead tomorrow.

b. \* John is dead tomorrow.

(26b)、(27b)は話者が確定的な事柄と判断できないと聞き手によって解釈されるので容認不可能と説明できる。動作述語の場合と同様に推測の will を用いる。

問題は次のような例である。

(28) a. I will be thirty-six tomorrow.

b. ? I am thirty-six tomorrow.

(29) a. I will be thirty-six next summer.

b. \* I am thirty-six next summer.

明日もしくは来年にある年齢になることは確実な未来である。しかし(28b)、(29b)に示すように現在時制を用いると容認度が落ちるというインフォーマントの判断を得た。特に副詞で表される時が遠ければ遠いほど容認度が下がるということである。この判断はどう説明したらいいのだろうか。

状態動詞の場合、現在時制を用いると現在すでにその状態が成り立つという1つの解釈がなされるのではないだろうか。しかし時の副詞は未来であり、矛盾を感じるということが考えられる。原理的には状態動詞であっても確実な未来を現在時制で表せることは次の Declerck (1991)の例でわかる。

(30) Our daughter is eighteen next week. (Declerck 1991: 93)

よって状態動詞の現在時制も確実な未来を示せるが、現在も成り立つという解釈がされやすいため容認度が落ちる場合があると考えられる。

#### 4. 仮定した世界と推測

さて最後に、時や条件の副詞節について考えてみよう。基本的には時や条件の副詞節の中では will は生じない。

(31) a. When he arrives, the band will play the National Anthem.

b. \* When he will arrive, the band will play the National Anthem.

(Quirk et al. 1972: 780)

しかしこれは単なる記述であって説明ではない。なぜ時や条件の副詞節の中では will が生じないのだろうか。またこの記述には例外が存在する。(32a)のように will が生じる場合があるのである。

(32) a. If the lava will come down as far as this, all these houses must be evacuated at once.

b. If it does come thus far, anyone still here will stand no chance of survival.

(Close 1980: 103)

この問題は、ここまでの考え方を発展させることで説明できるだろう。(32a)は「溶岩がここまで来そうだったら避難する」という意味であり、「ここまで来たら」ではない。来てからでは手遅れであり、来るという推測が成り立ったら避難するのである。if で仮定された世界で、ある推測がなされたらということである。そのため推測を表す will が必要となる。

仮定世界における推測という考え方で、次のような例も説明できる。

(33) a. I will come if it will be any use to you.

(Jespersen 1931: 262)

b. At three o'clock if it will be of convenience to you at that time.

(Brown Corpus)

(33a)は「お役に立てるようなら伺います」ということである。役に立てるかどうかは確実でないが、役立つと推測できれば行くと述べている。その分謙遜の気持ちが含まれ、一般に丁寧な用法と記述されているわけである。(33b)も同様に説明ができるだろう。

さらに次のような例もある。

(34) a. If he won't arrive before nine, there's no point in ordering dinner for him.

b. If you will be alone on Christmas Day, let us know now. (Close 1980: 104)

(34a)は9時前に着かないようなら、(34b)はクリスマスに一人になりそうならということで、そういう未来に対する推測が成り立てば今…と言っている。江川(1991:212)はif節の事柄が主節よりも後に起こる場合はif節にwillを用いると述べているが、それよりもwillを推測の法助動詞と考えるほうが原理的な説明になると思われる。

## 5. 名詞節の中の現在形

最後に名詞節の中の現在形について考えよう。これも時と条件の副詞節ではないので学校文法では例外となるであろう。しかしこれらは完全に文法的であり説明が求められる。

- (35) a. I hope that the parcel comes in time. [also *will come*]  
b. Suppose he loses his way.  
c. Let's assume our opponents win the election. [also *will win*]  
d. I'll see that nobody disturbs you. [also *will disturb*]  
e. Take care that she doesn't fall. (Quirk et al. 1985: 1008)

hope, suppose, assume, see, take careなどの補部になっているthat節は、時と条件の副詞節と同様に、話者が仮定している世界を表すものと考えられる。そのためその仮定世界の中では事柄は推測の必要なく確実に起こる。よって推測のwillは不要となる。ただしその確実性があまり高くないと思われる場合にはwillを用いて推測の意味を表現するものと考えられる。たとえば(35a)ではwillを使った方が現在形よりも話者の確信が弱いのである(cf. 小西 1985: 78)。

## 6. 結び

以上未来を表す現在時制について特にwillとの対比を中心に考察してきた。まず現在形が無標の時制であり、時の指示は他の語句によって決定されることを述べた。またwillを未来時制ではなく話者の推測を表す法助動詞と考えることによって様々な例を説明できることを論じた。特に、時と条件の副詞節内のwillについても仮定世界での推測と考えることで一貫した説明を与えられるこ

とを述べた。

## 注

\*本稿は、認知機能言語学談話会(1995年1月、北海道大学文学部)での口頭発表をまとめたものである。参加者から有益な助言をいただいた。ここに感謝したい。

<sup>1</sup>ただしスウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語では現在時制を示す標識(-r)が存在する。清水誠氏の指摘に感謝する。

<sup>2</sup>学校文法でwinをbe going toとともに未来形あるいは未来時制と呼んでいるものがあるが、これらは動詞の変化形ではないので、学習者に混乱を生じられると思われる。

<sup>3</sup>「時と条件の副詞節では未来の事柄も現在時制で示す」という学校文法の説明は次の例でも問題を生じる。

(i) I'll be back by the time when Joan comes.

when節はthe timeを修飾する形容詞節であり、時と条件の副詞節ではない。ここでの考え方に従えば、この文は「Joanが来る時」と推測なしに述べるのであるから、willは不要であると説明できる。

<sup>4</sup> activity, event, achievement, accomplishmentについてはVendler (1967)を参照。

## References

Close, R. A. 1980. "Will in *If*-clause," in S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics: For Randolph Quirk*, London: Longman, 100-109.

Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha. (安井稔訳『現代英文法総論』開拓社, 1994)

江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』(改訂三版) 金子書房.

Goodman, Fred. 1973. "On the semantics of futurate sentences," *Working Papers in Linguistics* 16, 76-89, Ohio State Univ.

Hall, R. M. R. and B. L. Hall 1970. "A note on will vs. going to," *Linguistic Inquiry* 1, 138-139.

Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part IV*.

London: Allen & Unwin.

小西友七. 1985. 『英語基本動詞辞典』 研究社.

Lakoff, George. 1971. "Presupposition and relative well-formedness," in D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits (eds.) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, Cambridge University Press, 329-340.

Leech, Geoffrey N. 1987<sup>2</sup>. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.

中右 実. 1994. 『認知意味論の原理』 大修館.

Prince, Ellen F. 1982. "The simple futurate: not simply progressive futurate minus progressive," *CLS* 18, 453-465.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell Univ. Press.